

佳作

ヒロシマ昭和20年8月6日

愛知県岡崎市立岡崎小学校四年 稲垣啓一

ぼくがこの本をえらんだのはちょうど原ばくを調べていたからです。原ばくを知った時は、一つの原子ばくだんで一気に人がしんだからとてもびっくりしました。もう少し知りたいと思って『ヒロシマ8月6日、少年の見た空』を読むことにしました。十二才の男の子の本当のお話です。もりおくんはお父さんの仕事のかんけいで広島に引っこしてきました。中学一年生でした。

八月六日、いつものように学校に行きました。その直後、だれも見なかったことがないようなオレンジ色の強い光が、もりおたちをつつみました。それがアメリカの新がたの原子ばくだんでした。もりおは目が見えなくなってしまう、橋の所にいたもりおを知り合いの人が見かけました。

最後の言葉は、

「つめたい水をください。」

でした。家族は、一週間さがしまわりましたが見つけることはできませんでした。たくさんの人がやけどで、「熱い熱い」と、プールにとびこみ死んでいました。

ぼくは夏休みにガラスエぼうに行きました。ガラスがとける所は、近づくだけでとても熱かったです。「これが原ばくの熱さと同じかな？」と、思って温度を聞いたら、七百度でした。原ばくの落ちた地面の温度は、三千度から四千度です。「えーもっともっと熱かったんだ」と、びっくりしました。

もりおの学校にいた馬は、もとの大きさが、倍かと思うほど赤黒くふくれ上りつっぱった足を四本とも空に向けているすがたはしょうげきでした。

ぼくがあつめている新聞の原ばくのきじをはっている原ばくノートがあります。

この原ばくを落とした、B29の飛行機エノラ・ゲイにのった五人の人の本当の音がろくおんされたテープがきふされたきじがあった。

「光につつまれた時、鉛のような味がした。きつと放射線のえいきょうだろう。とてもほつとした。」と、原ばくを落とした人が言っていた。そのきじを

見てぼくは「ひどい人だな。よく原ばくを落とすとしてそんなことが言えるな」と、思った。その下にもりおがいたんだ。もりおの学校三百五十三人が亡くなった。

もりおはお母さんに、会えずにうめられてしまった。ぼくは八月七日生まれです。もし七十三年前だったら、ぼくは生まれずに死んでいたのかもしれない。

ぼくはこう思う。せんそうは人の命をうばうからやっばいいけないと思う。だからぼくはせんそうをぜったいしない人になっていくんだ。